

真理認識に対する欲求と節度

—トマス・アクィナスによる“naturaliter scire desiderant”

(Ar., *Metaph.* 1, 1, 980a21) の解釈—

水田英實

1. はじめに

「人はみな生まれながらにして知ることを欲する」という周知の一節がアリストテレスの『形而上学』の冒頭の文章にある¹⁾。これに対してトマス・アクィナスはどのような解釈を試みているのであろうか。トマスの『形而上学注解』によれば、アリストテレスが『形而上学』において求めている知らないし学は、それが質料から離れて存在する実体（神および知性的存在）を考察するものであるかぎり「神の知」*scientia divina* あるいは「神学」*theologia* と名づけられるという²⁾。知ることに対するわれわれの本性的欲求が、神を知ることを排除するものでないと考えていたのでなければ、このような説明をすることはできなかったであろう。しかしその場合トマスは、われわれが本性的な欲求にもとづいて神を知ろうとすることは、いかなる仕方でも神を知ることを意味すると考えていたのであろうか。

ところでその場合、知ることを欲するという本性的欲求は、神を知ることを排除するものではないにしても、神が他の諸事物と同様の仕方でも欲求されると考えられているわけでもないことは言うまでもない。そればかりか事物を認識することに関して、トマス説は「人が神を認識するという目的を果たすことと無関係に諸々の被造物に関する真理の認識を求めるとき、真理認識に対する欲求における節度が失われる」と考える脈絡の中にある³⁾。しかしトマスは『神学大全』の最初の設問に答えるに際して「人間は理性の理解を越えたある種の目

的としての神に秩序づけられている」と述べている⁴⁾。これによれば人間理性は、神を認識することを目的として他の事物に関する真理の認識を求めるように秩序づけられているにもかかわらず、目的としての神そのものは人間の自然本性的理性による理解の範囲の外にあるとされるのである。いいかえれば、神を知ることがわれわれの本性的欲求から排除しなかったことによって、かえって他の諸事物について真理を認識することに関しても何らかの反省を伴う結果になったのではないか。生まれながらにして知ることを欲するというわれわれの本性的欲求に関するトマス説はそこに特徴があると言うことができるのではないであろうか。本論文において明らかにさせたいと思うのはこの点である。

2. 神に関する真理の認識

『神学大全』の最初の設問においてトマスが論じるのは「聖なる教え」*sacra doctrina* と呼ばれる神学が、哲学に属する他の諸学問とは別の教えとして成立する根拠である⁵⁾。設問の趣旨ないし論点は三つの異論の主張を取り上げることを通して示されている。異論のうち最初の二つはこの教えの必要性を否定しており、最後の異論（反対異論）は肯定している。それぞれの主張は大略次の通りである。

- (1) 理性の及ぶところにあることはすべて哲学に属する諸学問に託されている。『聖書』には「汝より高きことを求めるな⁶⁾」とあるから、理性を越えたことは企てるべきではない。哲学的諸学問以外の教えは無用である。
- (2) 存在するかぎりのことがらはすべて哲学に属する諸学問において扱われる。存在するかぎりのことがらの中には神が含まれており、これを対象とする部門は「神学」（または「神の知」）と呼ばれる。哲学的諸学問以外の教えは不要である。
- (3) 神から与えられた靈感によって書かれた『聖書』は有用である。『聖書』は哲学的諸学問のどれにも属していない。哲学的諸学問以外に有用な教えがある。

これら三つの主張は言うまでもなくトマス自身の説ではない。何故ならこの

教えが理性による認識の及ぶ範囲にないとすれば(1)の主張を、あるとすれば(2)の主張を選ぶことになり、いずれでもないとなし、有用性という観点を持ち出すならば(3)を主張することになるけれども、トマス自身の説は別にあるからである。トマスはここで、『聖書』に示された「人間の救い」salus humanaのために必要なことがらを信仰によって受け容れるところから始まる、理性を越えたことがらに関する「教え」をめぐる理性的な思索の成立を提唱して、(3)とも一線を描いた仕方で、(1)と(2)の対立を克服しているからである。

(1)の主張が全面的に否定されているわけではない。何故ならこの主張とトマス説との対立点は、「人間の認識よりも高いことがらは理性によって探求することができない」ところにあったのではなく、「神が啓示したことを、信仰によって受け容れることができる」とするか否かという点にあったからである。そこでこの異論に対する解答においてトマスは『聖書』の同じ箇所が続いて「人間の理解を越えた多くのことがらが汝に示された⁷⁾」とあることにも言及するのである。

(2)の主張に対してもトマスはそれを全面的に否定するのではなく、「同じことがらを、哲学的諸学問は自然理性の光によって認識されることがらとして扱い、別の教えが神の啓示によって認識されることがらとして扱う」ことに支障はないと答えている。つまり哲学的諸学問の一部門として神学において扱われることがらが、別の観点から、聖なる教えに属する神学において扱われることにもなるという見解を示しているのである。

ところで(2)の主張には上で触れなかった部分がある。そこには次のような見解が表明されている。「真であるもののみが知られる。真であるものと存在しているものは置換される（真であるものは存在しており、存在しているものは真である）。したがって教えは（知られていることを教えるのであるから）、存在しているものについてしか成立しえない。」この見解はトマスによってもそのまま承認されていると考えられる。この部分は異論解答において特に取り上げられていないからである。したがって「誰が」知るかという点を不問にして「何を」知るかという点だけを見れば、教えるものと学ぶものは同じことがら

に関わるとみなすことについては、トマスも異を唱えていないと考えられるのである。

(3)の主張もまたトマス説とは異なる。何故なら有用性という観点を導入することによって示されるのは、言うところの「教え」のそれ自体としての価値ではなく、他のことがらに依存した価値だからである。そのかぎりにおいてこの異論はトマスの全面的な支持を受けるまでにいたらなかったと思われる。むしろ全面的に否定されているわけでもない。しかしトマスがこの設問に対する議論の中で用いる「認識」という語は、実践という別の善に秩序づけられることによってではなく、それ自体として価値のあることがらを意味していると思われるのである。(3)の主張を反対異論として扱うにとどめた所以はこれであろう。信仰によって聖書の啓示を受け容れるところから始まる理性の思索が、それ自身として有する価値を認めるか否かという違いがそこから生じるからである。上述の(1)および(2)の主張に対して、啓示されたことがらを信仰によって受け容れるところから始まる思索の領域があることを示すことによって指摘しているのもこの違いである。

さて『神学大全』のこの最初の設問に対するトマスの主文解答の中に、「認識」の語を用いて次のように述べているところがある。「人間の救いのすべては神の真理の認識にかかっている。人間の救いのすべては神にある。⁸⁾それは「人間の救い」が達成されるために、目的としての神が人々に「あらかじめ認識されていること」が必要だからであるとされる。しかもそれは、目的としての神が理性の理解を越えた何らかのことがらとして「神の啓示によって人間に知られること」が人間の救いのために必要であったということだけでなく、「神について人間理性による探求が可能ながらに関して、神の啓示によって人間が教えを受けることが必要であった」ことをも意味している。しかし人間理性の理解を越えたことがらが何らかの仕方でも「あらかじめ認識される」ことが可能であるためには、「人間理性の理解が及ばないことがら」そのものは、さしあたり人間理性にとって「認識しえない」ものであったにしても、それが何らかの仕方でも「認識されうる」ものでありうるものが確立されていなければ

ならない。さもなければ矛盾が生じるからである。

むしろ認識の仕方に違いが見出されるのであれば、人間理性によって「認識されえない」ことが人間理性によって「認識されうる」ことを意味することがありうることは言うまでもない。しかしその場合「人間理性の理解を越えたことから」が人間理性によって認識されえないのに対して、「あらかじめ認識される」のは結局のところ人間理性によって認識されうることからしての「神について人間理性によって探求できることから」であることになるのであろうか。

そうであると考えられるとすれば、それは人間理性によって得られる何らかの神認識と同様に、啓示を通して得られる神認識もまた、人間理性に固有の仕方としての、感覚的事物の本質を知るという仕方では得られるものではないからである。神に関する本質認識の不可能性が確立されていなければならない点で、啓示にもとづく認識もまた人間理性にとっては感覚的事物から原因としての神的存在を推知する場合と同様だからである⁹⁾。しかし「信じる」という営みが成立するのは、人間の可能的な知性が可知的形象を得て事物の何であるかを知るところにおいてではなく、互いに矛盾する命題のいずれかを選ぶ意志の働きにおいてである。「信じる状態」*dispositio credentis*にある人は、二つの矛盾する命題の間でいずれとも判断しかねて迷うのではなく、何らかの理由で取りあえず一方を選択するのでもなく、といて原理に照らしていわば選択の余地のない仕方では真理の認識を得るのでもなく、その人の意志によって全面的に同意する仕方では一方を取り他方を捨てると言われるからである¹⁰⁾。

したがっていずれにせよ神について人間理性によって認識されうることは二分されることになる。というより、先の箇所で言われたのは、「あらかじめ認識される」ことが神の啓示によって知られることであるように、「人間理性によって探求できることから」に関しても神の啓示によって教えられるという仕方では知られることがなければならぬということであるから、神については、感覚しうる事物についてその事物の本質を理解する仕方ではなく、感覚によってとらえることができない事物について感覚しえたことから推知する仕方

を摘要しうるほかに、神の啓示によって教えられて知るといいう仕方があるということが新たに加えられていることになるのである。それはおよそ人間理性が推知しえないことを信仰によって同意して受け容れるという仕方でも知ることでもあるし、人間理性が推知することによって何らかの認識を得ることが容易になるという仕方でもいわば助けられて知ることでもある。いずれであるかを問わないからである¹¹⁾。

この点に注意するならば、『神学大全』の最初の設問においてトマスが問題にする、「哲学の一部門としての神学」*theologia quae pars philosophiae ponitur* と「聖なる教えに属する神学」*theologia quae ad sacram doctrinam pertinet* の区別は、フィジカとメタフィジカの間にある質料からの抽象の度合いの違いにもとづくものではないことは明らかである¹²⁾。ところで『命題集注解』の設問ではこの点が必ずしも明瞭に問われていない。そこでは「フィジカに属する諸学問とは別の教えが必要であるか¹³⁾」という問題を立てているからである。しかしながらそこでも哲学的認識のすべてがそれに向けて秩序づけられているのは「途上の幸福」*felicitas viae* であり、他方は信仰を前提して始めて可能になるとされる「天国における幸福」*felicitas in patria* をめざすものであって、いずれも神を観想するところに成立するけれども、一方は被造物を通して得られる認識にもとづくものであるから不完全であるのに対し、他方は神的光によって直接与えられる認識にもとづくものであるから完全であるという区別がなされている。さらに『命題集注解』においてトマスは、このような区別をした上で、すべての哲学の目的は神学の目的に下属しているから、神学は他のすべての学を支配し、それらを用いるという関係にあると述べている。同じ箇所でも最初に「正しい仕方でも考えた人たちはみな人生の目的は神を観想することにあるとした¹⁴⁾」と述べていることと対照させるならば、ここでもいわば選択の余地のない仕方でも生来的に知ることとは別に、「正しく知る」ことが求められる領域において、二種類の学を比較していることは明らかである。

人間理性による何らかの神認識が可能であるとされるのは、事物の本質が認識される領域の外に、事物の原因の存在を推知するという仕方でも得られる認識

の領域が拡大されるからであるけれども、その認識が「正しい仕方」で行われるために必要なことがらが認識される領域がさらにその外に設けられなければならないのであったのである。啓示にもとづく神認識という領域がこの教えによって拡大されているのである。ところでトマスは『形而上学注解』においてもこの視点から注釈を加えていると思われる。そこでもトマスによる考察の範囲は啓示による神認識を含むところまで拡大されていると思われるからである。

3. 神認識に伴う困難

神に関する真理が人間理性のみによって探求された場合に生じる事態として、トマスは『神学大全』第一部の上述の箇所において次の三つの難点を挙げている。すなわち「神に関する真理は、もしそれが理性によって探求された場合には、

- (1) わずかな人たちに、
- (2) 長い時間を掛けて、
- (3) 多くの誤謬を混入させたまま、
もたらされるに過ぎない。¹⁵⁾

この三つの難点は『対異教徒大全』においても理性のみによって探求された真理に伴う不都合として列挙されている。一部を省略して訳出するならば次の通りである。「この種の真理が理性のみによって探求されなければならないとしたら三つの不都合が生じるであろう。

- (1) 第一は、わずかな人たちが神認識を有することになったであろうということである。
- (2) 第二の不都合は、前述の真理を発見するにいたる人たちは、長い時間を掛けて辛うじて到達することになったであろうということである。
- (3) 第三の不都合は、われわれの知性の判断の甘さと表象の妨害の故に、人間理性の探求には多くの虚偽が混入したであろうということである。¹⁶⁾

『神学大全』における簡潔な記述は『対異教徒大全』において詳述されたことの要約なのである。さらに辿るならば、モーゼス・マイモニデスが『迷える

人々のための導き』において信仰の必要性を根拠づけるために挙げた「五つの理由」をあげることができる¹⁷⁾。『命題集注解』や『真理論』あるいは『ポエティウス三位一体論注解』では、ほぼ同様の脈絡の中でマイモニデスの名を明示している箇所が見出されるからである¹⁸⁾。

さて上述の三つの不都合は、言うまでもなく、神を知ろうとすることに伴うことがらである。しかも感覚によってとらえることができないことがらについて感覚しえたことから推知する仕方を摘要することによって得られる認識に関する見解である。しかしもしそれが、「知ろうとする」と「知る」とは別であるから、たとえ本性的なことがらとしてすべての人が知ろうと欲することではあっても、必ずしもすべての人が知るにいたるわけではないということが、神認識の場合にもあてはまるということであるなら、それは人間理性の理解を越えたことがらとして、誰も知らないと言われるのではなく、何らかの仕方でも認識しうることがらとして、一部の人だけが知ると言われていることになる。そのように考えてよいのであろうか。

「すべての人」が知ることを欲していながら、「わずかな人」しか知ることができないという事態が、神を知ろうとする場合に生じる原因として、トマスは『対異教徒大全』において次のような三つのことを挙げている。

「真理を発見することはその研究に専念してはじめて得られる成果であるけれども、多くの人たちは三つの原因のために阻止される。(1)まずとにかく體質的に不向きな人たちがいる。そこから多くの人たちは生まれながらにして学問することに不向きであるために、神を認識することという人間の認識の最高の段階に到達すべくいかなる研究に従事することもできないでいる。(2)ある人たちは家事の必要のために妨げられている。当然のことながら、人々の中には俗世のことがらの管理に追われて、観想による探求という静寂の中でひたすら時を過ごすことができないために、神を認識するという人間の探求の最高の高みに達することのない人もいる。(3)ある人たちは怠惰の故に妨げられている。哲学的考察のほとんどすべては神を認識することに向けて秩序づけられており、神的事がらを取り上げる形而上学は哲学の諸部門の中で最後に学ばれ

るのであるから、神について理性が探求しうることがらを認識するために、前もって多くのことがらを認識しなければならないのである。この意味で、大きな労苦をもって研究することなしに先に述べた真理を探求するまでにいたることができない。知ることに対する本性的欲求を人間の精神に植え付けたのは神であるけれども、知への愛の故にこの労苦を甘受しようとする人はわずかである。¹⁹⁾」

ところで『形而上学注解』の中にも次のように述べている箇所がある。

「人は生まれながらにして知ることを欲する。しかしある人たちがこの知るということに専念しないとしても支障はない。何故なら、何らかの目的を志向している人はしばしば何らかの原因のためにその目的を追求することからそれるからである。それは到達することの困難さのためであったり、他のことに忙殺されたためであったりする。こういうわけでたとえすべての人が知ることを欲しているにしても、必ずしもすべての人が知ることに専念するわけではない。それは他にかまけることがあるからである。この人たちは(1)身体的満足のために(2)あるいは現世的生活の必要のために(3)あるいはまた怠惰のために、学ぶことの労苦を忌避する。²⁰⁾」

それでは『形而上学注解』のこの箇所で何故トマスは、すべての人が必ずしも知ることに専念しないということを説明するために、『対異教徒大全』において神認識に伴う困難の原因として述べたことを取り上げたのであろうか。

トマスによれば、アリストテレスが「すべての人は生まれながらにして知ることを欲する」と述べたのは、まずもって知ること自体の価値を明らかにするためであり、その意味で「人はみな生まれながらにして知ることを目的として欲する」のであるという。この点についてアリストテレス自身が、知ることに対する本性的な欲求がすべての人に内在していることの証拠として、われわれの感覚の働きに注意を向けて、それが何かのために役立つという有用性の故ではなく、感覚することそれ自体の故に好まれるというあり方をして、感覚の中でも特に「見る」という視覚の作用に関してこのことが妥当するということを挙げていることは周知の通りである。アリストテレスがそこで指摘し

ているのは、しなければならないことが何もない場合であっても見ることそれ自体を喜ばしく思うものであるということから明らかなように、何かをするという仕方で行為者の外に向かう働きとは別の、行為者のうちにとどまる働きがあるということである。この点についてトマスもまたアリストテレスが特に視覚の作用に注目してわれわれ人間が感覚の働きそのものから喜びを得る存在であるとしたのは、感覚の中でも特に視覚が「認識的」cognoscitivus だからであると説明する²¹⁾。認識するということはそれ自体として行為者のうちにとどまる働きにほかならないからであるとしているのである。上述の、何らかの仕方で行為者に伴う困難に言及していると思われる箇所においても、同様の指摘を繰り返している。「本性的欲求が無意味であることはありえないから、アリストテレスは他の有用なことのためになしに知ることを求めることは無意味でないということを明らかにさせようとしている²²⁾」と説明しているのである。いかえれば先の箇所で、必ずしもすべての人が知ることに専念しないという問題を取り上げたとき、トマスはアリストテレスが『形而上学』において行為者のうちにとどまる働きとしての認識について述べた以上のことをその『注解』の中で述べているのである。

トマスの『注解』によれば、知ることに対する本性的欲求がすべての人間に内在しているというアリストテレスの命題には次の三通りの意味が考えられるという²³⁾。第一に、人間の可能知性は知識を得ることによってでなければ現実に認識者として存在していると言えないことに着目して、質料が形相を欲求することに比されるような本性的欲求があるとされる。第二に熱い物は自ずから熱を発し、重い物は自ずから落下するように、人間には知性によって認識して知識を得るといふ本性的傾向があるとされる。以上の二つの意味に解釈されるかぎり知ることを欲するという本性的欲求は欲求の実現をも伴っていることになる。しかしながら、第三に「分離実体が人間の知的認識の根源であり、これに対して人間知性は、完全なものに対する不完全なものとして関係している。人間は知性によってでなければ分離実体との接続を果たすことができない。しかし人間の究極の幸福は分離実体との接続を果たすところにある」という。「分

「分離実体との接続」によって得られる知識を求めることが、本性的な欲求であるとされるのである。この第三の意味に解釈されるときに、知ることは本性的な欲求であるにもかかわらず、必ずしもすべての人が知ることに努力を払うわけではないという説明が必要になったのである。

「分離実体との接続」によって実現される幸福の問題について、トマス自身の説は別にある²⁴。「人間の知性の上に何らかの上位の知性を措定しなければならぬということについて考察」するとき、トマスは「われわれの信仰の教えるところによれば、この離在的な知性は神自身にほかならない。神は魂の造り主であり、魂はこの神においてのみ至福をえるにいたる」と言うからである²⁵。しかしそこでもあくまで「アリストテレスのいう能動知性は魂に内属する」のであるとみている。トマスのこのような解釈は、「アリストテレス以後の哲学者たちのほとんどすべて²⁶」と相容れないものであった。しかしトマスは『有と本質』において有と本質に関する困難なことがらを明らかにするために、詳細にわたって論じた際に既に、人間知性が身体の形相としての魂に能力として内在することを確立しているのである²⁷。

『形而上学注解』においては「分離実体との接続」という、アリストテレス以後に生じた、知性に関する解釈史上の問題が取り上げられている。そしてこの仕方でも分離実体を知ることに伴う困難として、神を知ることに伴う困難と同じ内容のことがらを挙げているのである。そのかぎりにおいて、分離実体と神はことさら区別されることなく論じられている。というよりトマスはその『注解』において、アリストテレスが『形而上学』において求めている知らないし学は、それが質料から離れて存在する実体（神および知性的存在）を考察するものであるかぎり「神の知」scientia divina あるいは「神学」theologia と名づけられると考えている。しかしすべての人がこれを知るにいたるとは言われていない。本性的欲求であるにもかかわらず、すべての人が知ることを欲しているわけではないとされているのである。しかしそれは上位の完全な離在的な知性と下位の不完全な人間知性の間にある秩序に従って知ることを欲することのできる人はわずかであるとされるからである。したがってここでも、知るこ

と知ろうとすることが区別されるかぎりにおいて、しかるべき秩序に従って知ろうとする人が少ないということは、すべての人が本性的に知ることを欲するということと矛盾するわけではない。

4. 知ることと知ろうとすること

トマス説が「人が神を認識するという目的を果たすことと無関係に諸々の被造物に関する真理の認識を求めるとき、真理認識に対する欲求における節度が失われる」と考える脈絡の中にあることは、本論文のはじめに述べた通りである²⁸⁾。『神学大全』においてトマスがこの見解を表明しているのは、「専念」*studiositas* ということについて次のように論じる箇所においてである²⁹⁾。すなわち専念するということは、われわれが何かを研究する場合に順序としてまず注意を向けるものを認識する必要があるところから、もともと認識することに関係することであるけれども、直接的には認識を得ようと欲すること・努力することについて言われることであって、認識すること自体について言われることではないという。ところでそこでもトマスはアリストテレスが『形而上学』の冒頭で述べていることを引用し、それは人間が魂を有するかぎり本性的に何かを認識することを欲するという意味であるとしている。しかしそこではこの欲求が本性的であるとされるのは、人間が身体的本性を有するかぎり本性的に食と性を好むのと同様であるとされる。つまり節欲が必要な本性的傾向の一つとしての知識欲なのである。ただし「認識に関するかぎり人間には相反する傾向が存在している。魂の側からすれば人間には事物を認識することを欲するほうへ向かう傾向がある。（そこで過度に事物を認識することがないようにするために、この欲求を抑止することが賞賛されなければならない。）しかし身体的本性の側からすれば知識探求の労苦から逃れるほうへ向かう傾向がある。したがって第一の傾向に関するかぎり専念することは抑止することにある。この意味で専念は節制の一部である。しかし第二の傾向に関するかぎりこの徳性が賞賛されるのは、事物に関する知識を獲得すべく熱心に努めるところにおいてである。専念という名前はここから来ている。しかしこの徳性にとって本質

的であるのは、第一のほうであって第二のことではない。³⁰⁾

何故なら、学ぶことの労苦は認識を妨げるものであるから、それを逃れることは、認識することにかかわるこの徳性にとって付帯的なことがらだからである。ここから推してトマスには「知ろうとすること」に関する考察の視点が二つあることが分かる。それは、知ることの障害となるものを除去することは知ろうとすることに寄与するという視点と、知ろうとする欲求そのものの正しさを問題にする視点である。そこで「知ろうとすること」に関する考察という観点からみれば、すべての人が知ることを欲していながら、わずかな人しか知ることができないという事態が、神を知ろうとする場合に生じることの原因として、人間理性による神認識に伴ういくつかの不都合を挙げるのは、知ろうとすることに関する付帯的なことがらを論じているにすぎないことになる。わずかな人にしか知られないとしても、それは何らかの仕方で人間理性によって認識されることがらであって、誰も知らないと言われる部類のことがらではないのではないかという点に疑問が残ったのもそのためである。この場合に考察されているのは、障害がなければ知られるはずのことだからである。しかしトマス説には、知ろうとする欲求そのものの正しさを問題にするという視点が、もう一つ別にある。

認識に専念するというを問題にするとき、トマスは真理を認識することとそれ自体と真理を認識しようと欲求しそのために努力することとを区別する。そこで一方では、「真理を認識することとはそれ自体として言えば善いことであるけれども、付帯的に悪いことになりうる」と言う。それはある人が真理を認識したために高慢になるとか、罪を犯すためにその認識を用いるという場合がありうるからである。これに対して真理認識に対する欲求ないし努力には正しい仕方でのそれと誤った仕方でのそれがあるという。そこで、自慢したいがためにあるいは虚偽を語らんがために真理の認識を得ようとするのも誤った仕方であると言われる。しかしこれは付帯的に悪しきことが伴う場合であるにすぎない。これとは別に、「真理を学ぼうとする欲求と努力が秩序から外れること」から生まれる誤った欲求があるとされる。神を認識するとい

う目的から外れて被造物に関する真理を認識しようとする欲求はその一つなのである³¹⁾。

真理を認識することは、人間の本性的欲求にかなっているのであるから、それ自体として善いことである。そこで「哲学の研究に努めることはそれ自体として正当性のあることであり賞賛に値することである。哲学者たちは真理をとらえたからである。しかし『ロマ書』第一章に言われている通り、神がそれをこの人たちに啓示したのである³²⁾」とされる。もっとも同じ箇所で「ある哲学者たちは信仰を攻撃するために濫用している」とも言われる。しかしこれは先に「哲学的考察のほとんどすべては神を認識をすることに向けて秩序づけられており、神的なことがらを取り上げる形而上学は哲学の諸部門の中で最後に学ばれるのであるから、神について理性が探求しうることがらを認識するために、前もって多くのことがらを認識しなければならないのである。この意味で、大きな労苦をもって研究することなしに先に述べた真理を探求するまでにいたることができない。知ることに対する本性的欲求を人間の精神に植え付けたのは神であるけれども、知への愛の故にこの労苦を甘受しようとする人はわずかである³³⁾」と言われたことの域を出ていない。知ることの障害となるものを除去することは知ろうとすることに寄与するという視点からなされた考察だからである。

これに対して、「理性の理解を越えたある種の目的としての神に秩序づけられている」が故に、啓示によってあらかじめこの目的を認識する必要があると言われるのは、「正しい仕方では欲求すること」が求められていることによる。「人間は目的に向けて自らの意図と行為を秩序づけなければならないからである。³⁴⁾」むろんそれはいかなる目的であれ、それを欲求することは究極目的を欲求することにつながるという意味においてでなく、究極目的としての神をそれとして求めることを含意しているのでなければならない。「万物は本性的に神を求めるけれども、それは包括的に求めているのであって、特定して求めているのではない。しかし理性的被造物の欲求は、特定の神を求めるのでなければ正しいものではない。³⁵⁾」からである。いたずらに知ることを欲することを

戒めるという意味での、徳性としての専念の必要性の根拠はそこに言う「正しさ」に求めることができるのである。

『形而上学注解』においてトマスは、アリストテレスが『形而上学』において確立しようとしている学が「知恵」*sapientia* と呼ばれることにも触れている。またこの『注解』の序文では、知恵あるものの特質が他のものを秩序づけるところにあるとしている³⁶⁾。ところで秩序づけられたものにおいて見出される正しさは、秩序づけるものによってもたらされる。そこでこの『注解』においても、それが「知恵」に関する考察を伴っているかぎり、知ろうとする本性的欲求そのものの正しさもまた、その考察の範囲の中に含まれていたとも考えることができる。

しかし『形而上学注解』においてトマスが、人は生まれながらにして知ることを欲するというアリストテレスの命題を解釈するに際して、知ろうとする欲求そのものの正しさを問題にする視点を持っていたことは、「分離実体との接続」によって人間の幸福がもたらされるという説が、信仰の教えに従って最初から斥けられるのではなく、目的としての神について啓示によって教えられて知る必要があることの証拠として提示されているとみることによって、かえっていっそう明らかになると思われる。「分離実体との接続」を提唱する説が、「知ろうとすること」に関する二つの考察の視点のうち的一方から取り上げられていることは言うまでもない。わずかな人にしか知られない説として導入されているからである。

トマスは『注解』のこの箇所において、この説をいま一つの視点から、知ろうとする欲求そのものの正しさを欠く説として表立った批判しているわけではない。しかし、何らかの理由があってその視点から取り上げることがなかったのであろうにしても、取り上げることができなかつたということはあるまい。この点は『神学大全』やその他の著作から明らかである。したがって残るところその何らかの理由として考えられるのは、神について啓示によって知ることの必要性を事実として示すことであつたと思われる。そうすることによってこの『形而上学注解』においても、知ろうとする欲求そのものの正しさが確保さ

れることになると思われるからである。

注

- 1) Aristoteles, *Metaphysica*, 1, 1, 980a21 (OCT)
- 2) Thomas Aq., *In Met.*, prooemium S. Thomae (Marietti)
- 3) *ST* 2-2, q. 167, a. 1 c. (Leonina)
- 4) *ST* 1, q. 1, a. 1 c. (Leonina)
- 5) *Ibid.*
- 6) *Liber Ecclesiastici*, 3, 22.
- 7) *Id.*, 3, 25.
- 8) *ST* 1, *loc. cit.*
- 9) この点について『対異教徒大全』（lib. 1, c. 3）においてトマスは次のように述べている。「人間知性がある事物（たとえば石や三角形）の本質を理解している場合、それらの事物について認識しうることは人間理性の能力を越えるものではない。しかしわれわれにとってこういうことは神に関するかぎりおこらない。人間知性は本性的能力によって神の本質をとらえることはできないからである。この世の生の状態にあって人間知性の認識は感覚から始まる。したがって感覚の中に入らないことは、感覚しえたものから推知してそれらについての認識を得るほかには人間知性がそれをとらえることがない。しかし感覚しうることがらがわれわれの知性を導いて、感覚しえたものにおいて神の本質の何であるかを見ることを得させるということはある。それは感覚しうるものは原因の力とは比較にならない結果だからである。もっともわれわれの知性は感覚しえたことから神についての認識をうるに至り、神が存在するということや、第一の根源に帰属させるべき他の同様のことがらを認識することができる。したがって神について認識しうることがらのうちのあるものは、人間理性にとっても到達可能である。しかしあるものは、人間理性の力を全く越えているのである。」
- 10) Cf. *De ver.*, q. 14, a. 1 c. (Leonina)
- 11) Cf. *In Sent.*, lib. 3, d. 24, q. 1, a. 3, Solutio 1. (Vivès)
- 12) Cf. *In Boet. de Trin.*, q. 5, a. 1. (Marietti)
- 13) *In Sent.*, prologus, q. 1, a. 1.
- 14) *Ibid.*: “Ad huius evidentiam sciendum est, quod omnes qui recte senserunt posuerunt finem humanae vitae Dei contemplationem.”
- 15) *ST* 1, *loc. cit.*

- 16) SCG 1, c. 4. (Leonina)
- 17) Moses Maimonides, *Dux Neutrorum sive Dubiorum*, I, 34; cf. *The Guide of the Perplexed*. Translated with an Introduction and Notes by Shlomo Pines with an Introductory Essays by Leo Strauss (The University of Chicago Press, 1963)
- 18) *De ver.*, q. 14, a. 10 c; *In Sent.*, lib. 3, d. 24, q. 1, a. 3, Solutio 1; *In Boet. de Trin.*, lect. 1, q. 3, a. 1.
- 19) SCG 1, c. 4.
- 20) *In Met.*, lib. 1, lect. 1, n. 4.
- 21) *Id.*, n. 5. なお感覚の中でも特に視覚の場合をとりあげて認識者としての人間のあり方を明らかにする試みは、アリストテレスの『プロトレプティコス』においてもなされている。というより『形而上学』の序章は講義を行うに際してこの原資料から引き出されたことがらの単なる集成にすぎない」とも言われるのである。『形而上学注解』においてトマスが示した上述の解釈は、アリストテレスのこれら二つの著作の間に見られる対応関係を否定するものではない。しかし『プロトレプティコス』以来のアリストテレス説において、知ることに対する本性的欲求は、いかなる仕方でも、神を知ることに対する欲求でありえたのであろうか。われわれの問題はそこにある。; cf. W. Jaeger, *Aristoteles, Grundlegung einer Geschichte seiner Entwicklung* (1923), p. 69 sqq.; cf. W. D. Ross, *Aristotle's Metaphysics. A Revised Text with Introduction and Commentary*, Vol. I (1924)
- 22) *In Met.*, n. 4.
- 23) *In Met.*, nn. 2-4.
- 24) 拙論「トマス『エチカ注解』におけるアヴェロエス説批判—アリストテレス解釈者としてのトマス—」中世哲学研究5 (1986) ; 拙論「トマス・アキナスにおける能動知性の問題」シンポジオン37 (1991)
- 25) *ST* 1, q. 79, a. 4 c.
- 26) *In Sent.*, lib. 2, d. 17, q. 2, a. 1 c.
- 27) *De ente*, prologus, et c. 5 (Leonina); cf. 拙論「認識者としての魂の存在 (esse) について—トマス『有と本質』の研究(2)—」福井大学教育学部紀要 I 人文科学 (哲学) 37 (1988)
- 28) *ST* 2-2, q. 167, a. 1 c.
- 29) *Id.*, q. 166, a. 1 c.; q. 167, a. 1 c.
- 30) *Id.*, q. 166, a. 2 ad 3.
- 31) *Id.*, q. 167, a. 1 c.

- 32) *Id.*, q. 167, a. 1 ad 3.; cf. *Ad Romanos*, 1, 19 sqq.: “quia quod notum est Dei manifestum est in illis, Deus enim illis manifestavit. Invisibilia enim ipsius a creatura mundi, per ea quae facta sunt intellecta, conspiciuntur, sempiterna quoque eius virtus et divinitas;”
- 33) *SCG* 1, c. 4.; cf. *ST* 1, q. 2, a. 1, arg. 1 et ad 1. そこでは『正統信仰論』(*De fide orthodoxa*, 1, 1) においてヨハネス・ダマスケヌスが「神が存在するという認識がすべての人に本性的に植えつけられている」と述べていることをめぐって考察がなされている。
- 34) *ST* 1, q. 1, a. 1 c.
- 35) *De ver.*, q. 22, a. 2 c.
- 36) *In Met.*, prooemium S. Thomae: “sapientis est alios ordinare.”

A Natural Desire to Know and Moderation

Hidemi MIZUTA

In this paper the author attempts to make clear how Thomas Aquinas interpreted on the famous expression of Aristotle's *Metaphysics*: all men by nature desire to know. According to Aquinas, the proposition has three meanings. The third is that a human being seeks to connect with separate substances, which will bring a perfection to human intellect and the ultimate happiness to men.

Although this studious appetite is natural, there are few who can finally reach to know them. Aquinas says the reason is as follows. It is difficult for a human being to find out the truth about insensible immaterial things. If there are any obstacles, we would not be able to know about them. But in this case the disturbance lies in the knowing precisely.

The desire to know the truth, not the knowing precisely, can be either straight or crooked. When a person seeks to know the truth about creatures without heeding a righteous end, namely knowing about God, the inordinateness of the studious appetite to discover will cause vice. Moderation as a virtue is necessary in this case.

The necessity of the knowledge derived from a revelation of God must be considered here, but not only to remove obstacles to know. Because the hankering to connect with separate substances can be crooked as a desire to know the truth, it is necessary for human reasoning to have the recognition of God as a rightful end. This is a characteristic interpretation

of Aquinas about a natural desire for knowing, both in his *Summa theologiae* and in his commentary on Aristotle's *Metaphysics*.